ちょっとお茶にしませんか

鉄好人海外行

第8話

夕陽でセンチメンタルに

世界の三大夕陽はどこでしょう！

山本誠志
Masashi Yamamoto
日科情報株式会社　（元）住友金属工業（株）

「サンセット・クルージング」にでかけてみませんか。夕陽はひとを感傷的な気持ちにします。夕陽をみて「よし、やるぞ」という気持ちにはなりません。ひとをほっとさせるというか、今日も終わったなという気持ちになります。

今日も会議が終わりました。これからサンセット・クルージングでのパーティです。デッキから美しい夕陽がみえています。最後に夕陽をみたのはいつだったか思い出せません。月や星を見上げることも忘れていたこのごろです。感傷にふけっている間に、夕陽も落ちました。風もでてきました。船内では、すでにパーティは始まっています。さっそく仲間入りです。

ここで、夕陽の話題が展開しました。どこそこの夕陽が美しいとか、みんながそれぞれの場所を紹介します。というよりむしろ自慢しています。まるで自分の夕陽のように。でも、自分の故郷やいま住んでいるところの夕陽を自慢するひとはいません。みんながみんな、旅で訪れたところの夕陽を自慢しています。なぜでしょうか。旅も夕陽も、ひとから現実を忘れさせるからでしょうか。

次に、「世界の三大夕陽」の話題に移りました。三大夕陽とは変な言い方ですね。夕陽（太陽）は一つであり、いくつもないのですが、こんな言い方で通るのもわかるような気もします。

地平線に沈む夕陽、水平線に沈む夕陽、山の端に沈む夕陽など、夕陽が沈む場所によって全く違って見えるからです。街中からみる夕陽、部屋からみる夕陽、列車からみる夕陽、船のデッキからみる夕陽も違います。季節によっても違います。大きさも色も形さえも違います。故郷の夕陽や自分の住んでいるところの夕陽には、変化がないから気にしないのかもしれませんね。旅にでたときにみる夕陽に感激するのは、いつもと違った夕陽に気付くからでしょう。

さて、「世界の三大夕陽」とはどこの夕陽でしょうか。

ここで、私の夕陽の話を聞いて（読んで）下さい。かなり前になりますが、あるテレビの長編番組のタイトル画面に「黄金色に輝く夕陽」が使われていたことがありました。ひとづてに、あれはインドネシアのバリ島の夕陽だと聞いていました。その後、バリ島にいくチャンスに恵まれ、期待に胸を膨らませて、夕刻を待って海岸に行きました。空一面、真赤な夕焼けです。感激して座り込んでみていました。しばらくして、自分は黄金色に輝く夕陽を見に来たことを思い出しました。現地のひとに聞いてみました。黄金色の夕陽はみられないのかと。年間に3回くらいはそんな夕陽もあるかなとの答えが返ってきました。どこかの蜃気楼と同じですね。しかたなく、真赤な夕焼けをバックに記念写真を撮って帰りました。現像に出しておいた写真が出来上がりました。その写真をみてびっくり。なんと、黄金色に輝く夕焼けの中に自分がいるではないですか。現像の加減と思いますが、感激しました。思いが通じたのでしょうか。

若い頃、和歌山に勤務していたことがあります。夏には、帰宅時に夕陽がちょうど運転する車の進行方向に沈みます。その夕陽をめざして進むと、加太の港にたどり着きます。車を止めて、さざえの浜焼きを買って食べながら夕陽をみていたこともありました。

また、夕陽にちなんだ「地ビール」を通信販売で注文して飲んだこともあります。どこが夕陽かわかりません。きっと現地で夕陽をみながら飲めば、そのビールの味が感じられるのかもしれませんね。その時がくるのを楽しみにしています。

さて「世界の三大夕陽」ですが、私なりに調べてみました。結論は世界の三大夕陽は、それぞれのひとの瞼の裏にあるようです。ひとによって違います。共通した夕陽はないようです。その中で、マニラの夕陽をあげるひとが多くいました。でも、実際にみたのではなく、聞いた話とのことでした。

「夕陽をみるツアー」は聞きません。「ディナーツアー」では、夕陽のポイントで途中下車して夕陽をみるのも一興です。その後の食事も二倍に楽しめると思いますが…。「初日の出」は年の始めのお詣りとして参拝されますが、年の終わりの感謝として「大晦日の日の入り」詣ではいかがでしょうか。

「夕陽」は「マイブーム」のようなものだと思います。見たときの気持ちに大きく影響されます。それゆえ、ひとりひとりの夕陽です。いい夕陽にめぐり会いたいものです。みなさんの三大夕陽はどこでしょうか。